

司馬遼太郎の徳富蘆花と蘇峰観：『坂の上の雲』と 日露戦争をめぐって

高橋，誠一郎
東海大学

<https://doi.org/10.15017/16031>

出版情報：Comparatio. 8, pp.8-23, 2004-06-20. Society of Comparative Cultural Studies,
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



司馬遼太郎の徳富蘆花と蘇峰観 ——『坂の上の雲』と日露戦争をめぐる

高橋誠一郎

はじめに

司馬遼太郎（一九二一—一九九六）の歴史観をめぐっては、生前から「英雄史観」や日露戦争の評価などの問題をめぐり論争が起きていた。日露戦争開戦一〇〇周年を控えた今日、再びマスコミなどで『坂の上の雲』に言及しつつ、日露戦争を賛美する傾向が強くなっているように見える。

たしかに、『坂の上の雲』（一九六八—七二）の第三巻で司馬遼太郎は、日露戦争を「世界的な帝国主義時代の一現象である」としながらも、「ロシアは日本を意識的に死へ追い詰めていた」とし、一方「日本側の立場は、追いつめられた者が生きる力のぎりぎりのものをふりしぼろうとした防衛戦であった」と位置づけていた（Ⅲ・「開戦へ」）。

しかし、一九七二年五月に書いたこの長編小説の「あとがき五」で、幸徳秋水が死刑に処された時に行った徳富蘆花の「謀反論」にふれた司馬は、「近代を開いたはずの明治国家」は、「近代化のために江戸国家よりもはるかに国民一人々々にとって重い国家をつくらざるをえなかった」が、蘆花は「国家が国民に対する検察機関になっていくことを嫌悪」したと書いた。そして、主人公の一人である秋山真之がバルチック艦隊をうち破った後に、蘆花と同じ憂鬱に襲われたとも司馬は記しているのである。

この意味で注目したいのは、司馬遼太郎が一九六五年に「明治大正の読書人にキリスト教への関心をもたせたということ、大きな力だ」と指摘して、徳富蘆花を「近代日本をつくったヒューマニスト」として位置づけるべきだろうと述べていたことである。

さらに『坂の上の雲』のあとがきにおいて司馬は、徳富蘆花が陸軍

下士官の「手記」をもとに長編小説化した『寄生木』について、「少年のころ、最初に読んだ」のがこの長編小説であったことを認めつつ、「その後、私は『寄生木』を読んではないし、私の書齋にもない。しかし蘆花への私の気持は、愛情というよりつい音信を怠っている故郷の肉親の叔父に対するような感じであり、蘆花とその全作品への私の心情は絵画でいえば暖色でいろどられて」いるとした（傍線引用者、「あとがき五」）。

ここで司馬が「全作品」と書いていることを考えるならば、司馬は当然蘆花の実質的な処女作ともいえる『トルストイ』（一九九七）を読んでいたはずであるし、後で詳しく見るようにその形跡は充分に伺えるのである。しかも司馬は『坂の上の雲』の前年に書いた『殉死』にふれて、この小説を書いたとき、「乃木家の書生だった『寄生木』の主人公についての暗い気分が、まだつづいていたように思える」とも記していた。

ロシア文学者の阿部軍治は、「徳富蘆花という作家は今あまり読まれなくなった」ことを指摘しつつ、「戦前までは日本人の多くが徳富蘆花の文学に触れ」、「なかんずく、知識人のかんりの多くが蘆花から甚大な影響を受けた」と戦前の日本で徳富蘆花（一八六八—一九二七）が果たした大きさを高く評価している。このように見てくるとき、これまで蘆花の作品との関わりについて注目されることは少なかったが、司馬遼太郎は徳富蘆花の影響をもっとも強く受けた知識人の一人といえよう。

さらに司馬は先の文章で蘆花にとつては「父の代理的存在である兄蘇峰」が、「明治国家というものの重量感とかさなっているような実感があつたようにおもわれる」とし、「しだいに疎隔してゆき、晩年は交通を絶つた」と続けていた（Ⅷ・「あとがき五」）。『近世日本国民史』で徳富蘇峰が「戦前戦中の歴史観をつくつた」と指摘した歴史家の磯田道史は、「司馬さんは日本人に染み付いた徳富史観を雑巾でふきとり、司馬史観で塗りなおしていった」と指摘している。

このことを考えるならば、「自由平和の理想家」から、「力の福音の信者」と変貌したと自ら認めていた徳富蘇峰も司馬の視野に入っていたことはたしかであろう。実際、『坂の上の雲』の前年に蘆花の『寄

生木』を考察しながら『殉死』（一九六七）を描いた司馬は、後に見るように明らかに蘇峰の『吉田松陰』を意識しつつ『世に棲む日々』（一九六九〜七〇）を書いているのである。

以下、本稿では比較文学的な視点から徳富蘆花とトルストイの関係を詳しく考察した阿部軍治の研究をふまえて、徳富蘆花の作品と兄蘇峰の思想との関連や司馬の作品との関わりを具体的に分析することによって、四年と三ヶ月をかけて書かれた『坂の上の雲』における戦争観の変化の意味に迫りたい。私たちはこの作業をおして、日露戦争を賛美したとされることの多い司馬遼太郎が、実際には『坂の上の雲』を書くなかでナショナリズムに依拠して戦争を美化する近代の「国民国家」の危険性に気づき、この作品を終えた後では、徳富蘆花に近い「非戦の思想」を有していたことを明らかにできるであろう。（本稿では敬称は略す）。

第一節 徳富蘆花のトルストイ観と『坂の上の雲』

『坂の上の雲』の前半で司馬は、ナショナリズムを「国民国家」に必須のものとしながら、「文明」による「野蛮」の正当性を強調していた。たとえば、日清戦争の考察で司馬は、「侵略だけが国家の欲望であった」一九世紀末において、「ナショナリズムのない民族は、いかに文明の能力や経済の能力をもつていても他民族から軽蔑され、あほうあつかいされる」と書いた（Ⅱ・「列強」）。さらに、第三卷で司馬は「ロシアの態度には、弁護すべきところがあったくない。ロシアは日本を意識的に死へ追いつめていた。日本を窮鼠にした」（Ⅲ・「開戦へ」）と書き、小村寿太郎が「下僚に命じ、ロシアおよび英国がそれぞれ他国とむすんだ外交史をしらべさせたところ、おどろくべきことにロシアは他国との同盟をしばしば一方的に破棄したという点で、ほとんど常習であった」（Ⅲ・「外交」）と書いた。

そして、新聞報道について特にふれて、「日本政府は、戦争をおそれた」が、「世論は好戦的であった」と記し、「ほとんどの新聞が紙面をあげて開戦熱をあおりたて、わずかに戦争否定の思想をもつ平民新聞が対露論に反対し、ほかに二つばかりの政府の御用新聞だけが慎

重論をかかげているだけであった」と書いた（Ⅲ・「外交」）。

しかし、司馬は日露戦争を詳しく調べていく中で徐々に戦争に対する見方を変えていくのであるが、この意味で注目したいのは、戦争が起きるとトルストイがイギリスの新聞『ロンドン・タイムズ』に「悔い改めよ」と題する論文を載せたが、それは幸徳秋水と堺利彦によってさっそく翻訳され、一九〇四年八月に『平民新聞』に掲載されたのである。トルストイはここで「戦争は又もや起これり、何人にも無用無益なる疾苦此に再びし、誦詐（けつさ）此に再びし、而して人類一般の愚妄残忍忍亦茲に再びす……中略……人は其夢なるを信じて速かに醒め来らんことを希ふ」と記して、殺生を禁じている仏教国と「四海兄弟と愛を公言している」キリスト教国との間の戦争を、厳しく批判していた。

司馬は『坂の上の雲』の前半ではトルストイのこの「非戦論」にはまったく言及していなかったが、この作品の中頃、つまり旅順の攻防を描くころから強くトルストイを意識し始めて、「あとがき五」では蘆花が日露戦争の悲惨さを知った後でトルストイを訪れていたことにもふれている。

ここで興味深いのは、同じ様な歴史観の変化が戦前には日露戦争を支持した蘆花にも起きていたことであり、しかも、蘆花がそれ以前にはトルストイの平和主義を高く評価していたことを想起するならば、蘆花における屈折は司馬以上に複雑だったといえるであろう。つまり、日清戦争の終結から間もない一八九七年に蘆花は、トルストイからの強い影響もありその初期には「平民主義」を唱えていた兄蘇峰からの強い勧めによって書き始めていた伝記『トルストイ』をようやく書き上げていた。ここで、蘆花はロシア文学の発達について「露国政治上の圧政は万の迹出口を塞いで内に燃え立つ満腔の不平感懷は仮寓文字の安全管を通じて出るの外なかつたのである」とその理由を説明し、「十九世紀の下半にはツルゲーネフ、ゴンチャロフ、ドストイエフスキー、トルストイの四大小説家露国に出て各其方面に椽大（てんだい）の筆を揮つたのである」とした。そして、蘆花は「四家筆陣堂々露国から次第に欧州文壇に押出して、終には小説の冠冕（かんべん）」を仏国英国から奪い去つて殆ど欧州の好尚を一変せんとする程の

勢いとなつて、英国批評の大家をして『露国文学若し続々斯る産物を出すならば、我輩は速やかに露語を学ばなくてはならぬ』と叫ばしめたのである」として、ロシア文学の意義について述べた。

さらに蘆花はトルストイを「今日世界の一奇観である」と位置づけながらも、「若し社会に率先して社会に笑はれて場所外（は）づれた真理を唱導する者が無かつたら、社会は何に由つてか進まうぞ！四海同胞を最後の目的と認めながら国は国と噛み合い、人人を喰ふ十九世紀の今日に独り平和を呼号（こごう）するの勇氣ある者が無かつたら、所謂四海同胞に到達するは何の日であらう！」として、彼を「全露皇帝よりも世界に重い」としたのである（『トルストイ』・二三三頁）。

阿部軍治はこれが「日本におけるこのロシアの作家の研究ならびにロシア文学研究にとつても大きな収穫であり、この時期としては画期的な労作であつた」と指摘するとともに、『トルストイ』を書く時期こそ、蘆花の「作家としての基盤が形成された時だった」と記した（『蘆花』・五五～六頁）。

実際、蘆花はここでトルストイの主な作品を詳細に分析することによってその方法論をも習得していたと思えるのである。たとえば、蘆花は『戦争と平和』について、これはナポレオンがロシアに侵攻する前後の「露国社会の大パノラマ」であり、ここには「小供役者の真似芝居でなく、活人間の動く活社会が歴々と浮み出る」とした。そして、蘆花は「其頃はナポレオン戦争もさほど遠いことではなく、云わば今日の史家が幕末の歴史を書く様なもので」、「此小説を書くために翁が蒐集した材料は実に莫大なものである」と考察していた（『トルストイ』・九四～五頁）。

このような方法の例を蘆花の出世作となつた小説『不如帰』（一八九八）に見ることが出来ると思う。トルストイはロシアの存亡を賭けたナポレオンとの戦いを背景にした『戦争と平和』において、将校アンドレイと貴族の娘ナターシャの恋が卑劣な貴族の若者アナトリーの策略によって破綻にいたるいきさつと、戦場で傷を負ったアナトリーのふがいなさを描いていた。蘆花もまたこの作品において、日本の存亡を賭けた日清戦争を背景に大山巖將軍の妻の娘の悲劇をもとに、川

島武男大尉と將軍の娘、浪子との愛がそれを妬んだ卑劣な将校・千々岩安彦の画策によって離婚という悲劇を迎えることになるいきさつと、戦場でも不行跡を犯していた千々岩安彦の戦死を描いていたのである。

主人公の海戦での勇敢な活躍と悲恋を描いたこの小説は、読者の涙と共感をさそつて、たいへんな人気を得たが、若き司馬遼太郎もこの小説を熱中して読んだであろう事は想像に難くない。なぜならば、司馬は少年期には漱石の小説は難しく、子規もそのころの感受性にはまったく無縁で、「蘆花ばかりは、やや色氣づいた中学初年度の年齢にとつてはおもしろかった」とも認めているのである。実際、蘆花は主人公の武男が病いを得た妻に心を残しつつも、国難に対処するため「私」を殺して「公」のために毅然として「征清」の戦場へと赴いたとし、旗艦松島に乗艦した武男の活躍や日本と清国の艦隊の黄海海戦を華々しく活写していた。

さらにここでは武男と浪子との美しい愛情が描かれていたばかりでなく、娘の苦悩に対しても深い情愛のこもったやさしさで接した父親の將軍も描かれているが、そのモデルとなつた大山巖に対する司馬の評価は『坂の上の雲』においてもきわめて高いのである。

ただ、後に蘆花から『不如帰』の英訳である『ナミコ』を送られたトルストイは、蘆花を「もつとも優れた日本の作家」としながらも、この作品を「ヨーロッパと私の」模倣で「あるとも語っていた（『蘆花』・一二四頁）。

このようなトルストイの『不如帰』に対する厳しい評価には、単に蘆花だけではなく、日清戦争後の一八九六年秋にロシアを訪れたが、「人道と愛国心」とは両立しないことを説いたトルストイに対して、自分は日本が「世界列強と対等の位地」に立つことを望むとして、その違いを明言していた兄蘇峰の印象も強く残っていたと思われる。

蘇峰は帰国後に「トルストイ翁を訪ふ」という訪問記を自分の『国民新聞』に発表し、それは「生涯、著作、総編」から成る蘆花の『トルストイ』にも再録されているが、そこにはトルストイと孟子や墨子についてや、ロシアの帝政と日本の帝政の違いについても議論したことや、トルストイの教えに反して、長男夫妻が肉食であることや、次

男が軍服を着た士官であることなど「理想家」トルストイ家の実態を批判するような文章が、農民の生活の惨めさを強調した文章とともに記されていた(『トルストイ』・四〇〇六六頁)。つまり蘇峰はトルストイの考えは承知していたのであまり議論しなかつたと書いているが、その主張の違いは初めから明白だったのであり、この訪問記からは蘇峰がはじめからトルストイとの議論をおして自分の主張を明確にするために訪れたという感すら受けるのである。

一方、蘆花はこの伝記において、トルストイが『戦争と平和』に先だつて皇帝に対するクーデターを企てた『十二月党』を題目として一篇の大小説」を、「書く積りであつた」ことを紹介して、「其主人公の過去の生涯を知る必要があつて、段々溯つて終にナポレオン戦争の当時に到り、其頃の風俗、習慣、家庭、社会、宮廷の有様から戦争の事実まで遍く探求して、其結果を書いたものが、即ち『戦争と平和』である」と書いて、執筆の過程にも注意を向けていたのである(『トルストイ』・九四頁)。

それゆえ、トルストイの思想や哲学を深く考察してその意義を賞賛した『トルストイ』のなかに、蘆花の主張との差が大きい蘇峰の文章が再録されていることは強い違和感を覚えさせるものであり、両者のトルストイ観の違いは、その後の両者の不和を象徴的に物語っていると思える。

蘆花と蘇峰の関係を考える上では、伊藤博文首相や、井上馨、山県有朋、さらには板垣退助、後藤象二郎など実在の多くの政治家たちをモデルにした歴史小説『黒潮』(一九〇二年一月〜六月)と『戦争と平和』の考察がきわめて重要だろう。

この小説で蘆花は主人公の父である東老人に、人民には重税を課しながら、その税で着飾って舞踏をし、妾をおき、芸者娼妓を買っている政治家を、「西洋人に阿諛(おべっか)」をする一方で「皆公を忘れて、私ばかり當」んでいると批判させ、明治政府を「人民に大不義の亡国政府」と断じさせて、政府の欧化政策や藩閥政治を厳しく批判させていた³¹。阿部は東老人の「元幕府重臣東老人の頑固な一徹さは、『戦争と平和』の老ボルコونسキイ公爵を思わせる」とし、鹿鳴館をモデルとした吼々(ゆうゆう)館の演芸会の場面から始まる小説の

書き出しも、『戦争と平和』冒頭の「アンナ・パーヴロヴナ・シエールの夜会の場面」から「ヒントをえたのではないかとも思われる」と書いた(『蘆花』・一〇二〜三頁)。実際、蘇峰は一九五一年に書いた「蘆花弟と予」という文章において、自分が『戦争と平和』を例に挙げながら、「維新の大改革を背景」にした歴史小説を書くように勧めたと記しているのである³²。

この歴史小説を論じた神崎清は、東老人のモデルを土佐出身で当時一時農商務大臣をつとめた谷干城であるとした³³。これに対して阿部は「モデルは一人であるよりは複数」であろうとし、「主に横井小楠と蘇峰を継ぎ足し、それに自己の思想を織り込んで造り上げているように筆者には思われる」とした。そして、蘇峰が自ら「鹿鳴館の舞踏とか、徒らに外国の文明を粉飾するとか、特に外国物質文明を崇拜するとか云ふ事は大嫌いであつた」と書いていることに注目しながら、兄から示された筋ではこの作品の主人公が「父の志をついで明治政府と闘うが、時とともに目が開け、反感が消えてゆく」とされていることから、「弟はほかでもない兄の中に、主人公を「見出したのだ」とと結論している(『蘆花』・九六〜九頁)。

実際、『将来之日本』(一八八六)において若き蘇峰は、具体的な統計資料に基づいて数字を挙げながら欧米列強における戦争や軍事費がいかに国力や民力を疲弊させてきたかを指摘し、「わが邦に流行する国権論武備拡張主義」を、「その新奇なる道理の外套を被るにもかかわらず、みなこれ陳々腐々なる封建社会の旧主義の変相に過ぎざるなり」と一刀両断に論駁し、その後も平民主義を主張して内閣批判の鋭い論陣を張っていた³⁴。

しかし、欧米旅行から一八九七年に帰国すると内務省勅任参事官に任じられた蘇峰は、読者からその「変節」を厳しく批判されて『国民之友』などの雑誌の廃刊に追い込まれていたが、その翌年に成立した山県内閣がすすめた大増税・軍備拡張に協力していたのである。

第一編の出版にあたって、蘆花が兄の「山の如き」恩義には感謝しつつも、「帝国主義」を執るようになった兄と「人道主義」を執る自分との違いを挙げて、この小説を兄の「民友社」からではなく、自分の「黒潮社」から出す決意をしたことを述べていることを考慮するな

らば、阿部の説明は『黒潮』の挫折の主要な理由に迫り得ているだろう。

さらに蘆花はこの時期に書いた「何故に余は小説を書くや」という記事において、「小説家はまた小スケールに於ての歴史家なり。史家は社会と云へる個人の発展を描き、小説家は個人と云へる社会の命運を辿る」とし、「大歴史家は大詩人と共に大預言者なるが如く、大小説家も亦大預言者なり」と述べて、目標とする小説家としてユーゴー、トルストイ、ストー夫人の名を挙げていた（『蘆花』・一〇七頁）。

阿部は大町桂月が「明治社会のあらゆる舞台とあらゆる人物は詳写せられ、明暗の両面歴として掌紋を指すが如し」と『黒潮』を賞賛し、中村光男も「社会小説として注目すべき作品で、その中絶はある文学史的意味」を持っていたとこの小説を高く評価していたことを紹介している（『蘆花』・一〇五・六頁）。このような蘆花の小説観や『黒潮』の構造は、歴史小説家を目指していた司馬遼太郎にも影響を与えた可能性がある。実際、明治初期の欧化政策や藩閥政治に対する批判は、明治維新以降の社会を描いた『坂の上の雲』の第一巻においても顕著である。たとえば賊軍とされた松山藩出身の秋山好古は、苦勞して師範学校を卒業し、旧松山藩士の和久に勧められて改めて士官学校に入學し直すことになるのだが、「日本の政治と軍事は薩長がやる」という和久の言葉はその理由を物語っているだろう。つまり、好古の決断の一つの理由は政治や軍事における薩長の権力独占に対する批判だったと思えるのである（Ⅰ・「春や昔」）。

そして司馬は正岡子規が英語が出来なかったばかりに苦勞したこと注意到促すとともに、後に「総理大臣の秘書官」などを歴任することになる人物が、東京大学政治学科の学生だったときに、子規を排斥した問題にふれて、それは文学が「日本帝国の伸長のためにはなんの役にも立たぬもの」と見なされていたからだとし、教育が国家目的に添うことが強調される中で、このような思想は「日本の帝国時代がおわるまでの軍人、官僚の潜在的偏見」となったと指摘した（Ⅱ・「日清戦争」）。

このように見てくると、「祖国防衛戦争」としての日露戦争を描こうとしたとき、司馬遼太郎の視野にはナポレオンとの戦いを描いたト

ルストイの『戦争と平和』が強く意識されていたと思われる。なぜならば、日露戦争の勝利は日本人に民族意識の昂揚をもたらしたが、トルストイが大作『戦争と平和』において描いたのも、「祖国戦争」と呼ばれるロシア人の民族意識の昂揚を呼び起こした戦いだったのである。

この意味で注目したいのは、『戦争と平和』と『坂の上の雲』における主人公の選び方と作品の構成の類似性である。長編歴史小説『戦争と平和』においてトルストイは、軍人アンドレイだけでなく、後に捕虜となる地主のピエールや貴族の娘ナターシャの三人を主人公とすることで戦争を様々な視点から全体的に描くことに成功した。一方、司馬遼太郎も松山出身の三人の若者たちを主人公としつつ、彼らの生活を通して描くことで戦争を抽象的なものとせず、市民、陸軍、海軍という三つの視点から戦争を描こうとしていた。

さらに、トルストイはこの長編小説のクライマックスをナポレオンによるロシアへの侵入とモスクワの占領という未曾有の危機を迎えた一八二二年に設定しながらも、一八〇五年のアウステルリッツの戦いから始め、さらに一八二〇年のエピソードまで非常に長い期間における主人公たちの苦悩や成長を丹念に描いていた。

司馬遼太郎も『坂の上の雲』のクライマックスを日露戦争に設定しつつも、明治維新以降の日本の状況や日清戦争（一八九四・五）、さらに秋山真之が観察した米西戦争（一八九八）にも言及し、エピソードともいえる「雨の坂」では主人公たちのその後にも触れているのである。

ただ、『戦争と平和』においてロシア人の勇敢な戦いを描きつつもトルストイは、この戦争を「人間の理性と人間のすべての本性に反する事件」とよび、「数百万の人々がたがい」、「略奪、放火、虐殺」などの、「犯罪を犯し合い」ながらも、「それを犯罪とは思わなかった」として、戦争自体を厳しく批判していた¹⁵。

しかし、伝記『トルストイ』において、「人人を喰ふ十九世紀の今日に独り平和を呼号するの勇氣ある者」としてトルストイの哲学を高く評価していた蘆花は、日露戦争が始まると「乗り出した船である。亡びても勝たねばならぬ。勝つまでは闘はねばならぬ」と感じたので

ある。この徳富蘆花の文章を引用した阿部軍治は、「この蘆花の書き振りに、中野氏の指摘するように、自棄になつてゐる感じが、内心は『苦渋に充ちたものがあつた』だろうとし、「この時彼はその人道主義と愛国感情の板挟みになり、…中略…精神的混迷を一段と深める結果になつてゐた」と考えられるのである」と指摘した（『蘆花』・一一三―一一四頁）。

一方、司馬遼太郎も『坂の上の雲』を書き始めた頃は「各国交際の道二つ、滅ぼすと滅ぼさるるのみと云うて可なり」と『通俗国権論』において主張した福沢諭吉や¹⁶、二〇世紀を帝国主義の時代ととらえた徳富蘆花とともに、戦争を不可欠のものと考へてゐたように見える。こうして、『坂の上の雲』を書き始めた当初、その構成や主人公の選び方を参考としつつも、司馬にとつて『戦争と平和』はその理想主義的傾向が批判されるべき歴史小説として捉えられていたように思へる。

第二節 近代戦争としての「祖国戦争」と日露戦争の類似性

司馬は第五巻ではロシア側が都市を要塞化して守つてゐた旅順攻防の悲惨な戦いを描く中でクリミア戦争に言及し、ペリーが日本に來航した一八五三年におきたこの戦争と日露戦争は、ともに「ロシアの南下膨脹政策からおこつた」であり、「その本質は酷似している」とし、「英国がその植民地政策上、トルコに味方したことも、日露戦争に似ている」とした（V・「水師營」）。

しかし、興味深いのは同じ章で司馬が旅順とセヴァストポリの攻防を比較するなかで下士官として参戦してゐたトルストイに注目していることである。すなわち司馬は、凄惨な戦いとなつた堅固な要塞である旅順の戦いを描く中で、「戦いの惨烈さは、近代戦のそれを十分に予想させる」セヴァストポリの攻防戦との類似性をも強く意識するようにする。そして司馬はこの攻防戦に、まだ青年だつたトルストイが、「下級将校として従軍」しつゝ、「籠城の陣地で小説『セヴァストポリ』を書き、愛国と英雄的行動についての感動をあふれさせつつも、戦争というこの殺戮だけに価値を置く人類の巨大な衝動

について痛酷なまでののろいの声をあげている」ことには注意を向けた（V・「水師營」）。

司馬のこの文章は、『セヴァストポリの記』三篇は、作者自から砲兵士官としてセヴァストポリの山手の一砲台を受け持つて居る所謂砲烟弾雨の間に書いたもので、この「軍事の記叙は一風変つて、著しい面目を備えて居るが、此は前後五年間軍籍に居た賜物である」とした蘆花の文章を想起させるのである（『トルストイ』・七八頁）。

この意味で注目したいのは、司馬遼太郎が『坂の上の雲』のあとがきにおいて、実際に日露戦争にも従軍した下士官の「さまざまな種類の小型ノートブック四十冊からなる」手記をもとにした蘆花の『寄生木』について、「この小説は蘆花自身も書いてゐるように主人公の小笠原善平の自伝が基礎になつており、蘆花がそれに筆を入れたとされている。小笠原善平は岩手県の貧農の秀才で、東京に出てきて乃木希典の家の書生になつた。やがて陸軍士官学校に入り、任官して日露戦争に従軍した」とかなり詳しく紹介していることである（VIII・「あとがき五」）。

日本文学研究者の平岡敏夫は、『寄生木』を今日読む人はすくないが、この作品は「けつして忘れ去られてよい作品ではない。ここには、ひとりの明治の青年の血と肉が感じられるし、その青年を描き出した蘆花という、近代文学史に独自の位置を占める作家の内面的真実をうかがうこともできる」とした¹⁷。

実際、小説『寄生木』は「生い立ちから出奔まで」を描いた上篇、「大木邸の書生となつてから陸軍士官学校卒業まで」を描いた中篇、「日露戦争から凱旋し、その彼の恋愛事件まで」を描いた下篇と、エピソードともいえる「後の巻」の四部から成る大河小説であり、この小説は、実際の下士官の視点から当時の状況を詳しく描いており、貴重な記録という性質も兼ね備えてゐるのである。たとえば、戦場では旅順での戦闘の結果、「著しい死傷の報は公報無くも萬人の耳に入つて、司令官に対する非難の声は良平の胸を痛くした」と書かれており、その被害の模様が、次のようにまざまざと描かれてゐる。「大連の病院は第七師団の傷病者で一っぱいであつた。…中略…一月三〇日の一夜に、師団は二〇三で殆ど全滅。」「新田、森尾、川口、水上各中

尉は？——戦死、戦死、戦死。誰、誰、誰少尉も戦死。某大尉某大尉も戦死某少佐も戦死……中略……要塞戦の激烈には、覚悟の良平も一驚を喫した。良平は図らずもここで大木令息祐保君の二〇三での戦死の事を聞いて、胸を轟かした。傷兵の口から惨憺たる旅順戦を聞かされて士気の衰退は非常であつた。……中略……旅順急行の命が下つて、船から下りてまだ足がふらふらする八百名は雪を冒して行軍した。士気衰えて落伍者が多く、唯八百名の行軍が二里にも及んだ。……中略……叱つても、諭しても駄目。一列やら三列やら二列やら三々五々。これじゃ田舎の葬式にも劣る、と良平は思つた『寄生木』下篇・「砲弾の洗礼」¹⁸。

実はこのような『寄生木』における戦場の描写は『坂の上の雲』における次のような描写にも大きな影響を与えていると思える。司馬遼太郎もここで、旅順で決死隊が「ようやく松樹山西方の鉄条網の線に到達したとき、敵の砲火と機関銃火はすさまじく、とくに側面からの砲火が白樺隊の生命をかなりうばつた」とし、「三千人の白樺隊が事実上壊滅したのは、午後八時四〇分の戦闘開始から一時間ほど経つてからであつた」(Ⅳ・「旅順総攻撃」と描写した)。

一方、蘆花も『寄生木』において「地球上黄白両人種の衝突は早晩免るべからざる」と考え、「東洋の為に黄色人種の為に弾丸に斃れん」と決意して軍人になる決意をし、砲兵士官だったナポレオンに憧れて熱心に砲兵を志願したこと、さらには日露戦争に際して出陣するにあつて「天に代わつて不義をうつ／忠勇無双の我兵は／歓呼の声に送られて／今ぞ出で立つ父母の国」という勇ましい歌で送られた下士官の主人公が、「東洋のため戦う」我が軍が暖まるために高粱を焚こうとするのを妨げる中国人に対しては、「憎むべきかな利己主義のチャンチャン奴」と感じる場面などを通して、自国の正義を主張しつつ「大東亜共栄圏」を唱えながら世界大戦へと突入することになる昭和初期の軍部の雰囲気をも描いていた。

こうして、戦争を「文明」による「野蛮」の征伐として正当化する歴史観の問題点に気づいた司馬遼太郎は、日露戦争においてロシアの革命家や独立運動家を支援した情報将校明石の活躍を描いた後で、「西方のゲルマン文化を東方のロシアにうけわたす役割をした」ポーラン

ドが、「ロシアの属領となつてしまつてゐるため、壮丁が大量に徴兵され、極東の戦線」で無意味に亡くなつてゐる悲惨な状況に触れつつ、「朝鮮を通じて大陸文化を受容した」日本が、「いちちはやく近代化した」後では、「朝鮮を隷属させようとし、げんにこの日露戦争のあと、日韓併合というものをやつてしまひ、両国の関係に悲惨な歴史をつくつた」と記すようになるのである(Ⅵ・「大謀報」)。

そして司馬は、ロシア陸軍の退却を描いた第七巻で、英国とは「情報によつて浮上している島帝国」であるとして、日英同盟がアジアにおけるロシアの勢力拡大を防ぐために結ばれたことを示唆するとともに、ロシアが英国と同盟してナポレオンと戦つた時には、ロシア軍の「退却」は軍事的な「戦術」とされたが、日露戦争に際しては、ロシア軍の「退却」は「敗北」として世界中に報道されたとして、「文明国」の側から発せられる「情報」の問題に注意を促した(Ⅶ・「退却」)。

『坂の上の雲』の第七巻と第八巻の多くの章では、ロシア艦隊との戦いに備えて作戦を練つた秋山真之や東郷連合艦隊長官などの人柄と行動、そして海戦の様相が詳細に描かれている。しかも、司馬は日本の同盟国イギリスによつて、ほとんどの港を押さえられ、さらに戦況が悪くなるとフランスからの協力も断られるようになる中で、ドイツの船から石炭を買い、それを洋上で搬入しなければならなかったロシアのバルチック艦隊の大遠征と苦闘をも、ロシア側の資料にも拠りながら第四巻から第七巻にかけての多くの章で描いていたのである。

さらに司馬は、バルチック艦隊が遠征に際して買ったドイツ産の石炭は質が劣り黒煙を吐いたので、日本海軍から発見されやすかつたことにもふれているが、このとき彼は石炭や石油などの燃料を持たずに、太平洋戦争へと踏み込んだ日本海軍との類似性を意識し始めていたといえよう¹⁹。

こうしてかつてロシアにおける庶民階級の民度の低さを強調していた司馬は、プリボイの歴史小説『ツシマールバルチック艦隊の壊滅』(上脇進訳、原書房)などを意識しながら「ロシア側の従軍者たちの手記はじつに客観的態度に富んだすばらしいもの」があるとし、「それらを読んでゐるうちに当時のロシア人の民度についてのわれわれの既成概念を是正しなければならぬと幾度おもつたかわからない」と

書いているのである。²⁰

このように見てくるとき注目したいのは、司馬が第七巻において、「日本においては新聞は必ずしも叡智と良心を代表しない」と断言し、「満州における戦勝を野放図に報道し続けて国民を煽っているうちに、煽られた国民から逆に煽られるはめになり」、「のちには太平洋戦争にまで日本をもちこんでゆく」(VII・「退却」)ことになったと新聞報道のあり方をも厳しく批判していることである。

この時、司馬は前半では全くふれていなかったトルストイの反戦論や蘆花の『寄生木』の意味を再考察し始めていたと思える。すなわち、トルストイは「悔い改めよ」とする論文で戦争に赴く兵士たちについて「身に制服を着け、諸種の凶器を携帯して、一種の大砲の食料たるべき数万の人類は、祈禱、説教、勸奨、行列、絵画、新聞の爲めに昏迷せられて」(傍線引用者)、自らの「生命の危険」を冒しつつ、「何の恩怨なき人類を殺さんが爲めに出発す」と描写していたのである。²¹この意味で興味深いのは、蘆花の小説『黒潮』の挫折が木下尚江の反戦小説『火の柱』を生み出すきっかけともなっていたことである。ここでは日露戦争直前の日本の雰囲気を知るために、『火の柱』が書かれるにいたった状況とこの作品の内容をみておきたい。²²

一八九九年に東京毎日新聞に入社した木下尚江は、一九〇三年春に蘆花に対して藩閥政治を厳しく批判した小説『黒潮』の続編を新聞小説として書くことを依頼したが断られ、山崎訳でトルストイの『復活』の翻訳を載せたが(九月〜十二月)、不人気で中断となっていた。²³このような状況を打開するために木下が書いたのが新聞小説『火の柱』(一九〇四一月〜三月)であった。ここでは戦争の機運が高まっていた時期を背景に、「売国奴」や「露探」などと非難されながらも、「同胞新聞」(平民新聞などがモデル)を発行して日露戦争に反対しつづけた主人公のキリスト教社会主義者の篠田長二の活躍が描かれていた。未完となった蘆花の『黒潮』と同じように、伊藤首相や御用商人の大倉喜八郎、さらに幸徳秋水など実在の人物をモデルとし、またトルストイの正教会からの破門にもふれていたこの小説は、「政治の墮落、社会の腐敗、軍隊の跋扈、黄金の全能」を批判して読者の共感を呼んだ。²⁴しかし、この小説は「日露断交」が報じられた日に主人公

が逮捕されて終わるが、著者の木下尚江自身も間もなく論文「軍国主義の言論」を書いたかどで起訴されたのである。

このような流れの中で、欧米においては読者獲得競争のために「事実の報道よりも寧ろ人を驚かすことを貴しと為す傾向」があることを指摘し、さらにボーア戦争についても「様々の事を捏造して報道」したと伝えて、冷静な報道の必要性を訴えていた『万朝報』さえもが、戦争への覚悟を求めるようになっていった。²⁵

さらに一九〇四年に与謝野晶子が「君死にたまふこと勿(なか)れ(旅順口包囲軍の中に在る弟を歎きて)」を発表すると、評論家の大町桂月は『義勇公に奉ずべし』のたまへる教育勅語、さては宣戰詔勅を非議したとしてこれを激しく非難し、晶子の弁明に対しては、「もしわれ皇室中心主義の眼を以て、晶子の詩を検すれば、乱臣なり、賊子なり、国家の刑罰を加ふべき罪人なり」といっそう厳しく批判したのである。²⁶

そして政府は「非常特別税」などの重税だけでなく、徴兵令の改正によつて「五年が一〇年」に「兵役年齢も三二歳から三七歳にまで」五年間を延長するなど国民に苦難を強いたが、井口が指摘したように日本でも欧米と同様に、戦意の高揚を訴えた新聞はいずれも三倍近く購読者数を飛躍的に伸ばしたのである。一方、反戦を訴えた『平民新聞』は、「ああ増税」という社説を非難されて発行・編集人の堺利彦が禁固の二ヶ月の判決を受けて入獄を命じられて発禁となり、一九〇五年には廃刊にいたっていた。

司馬遼太郎は「勇気あるジャーナリズム」が、「日露戦争の実態を語っていれば」、「自分についての認識、相手についての認識」ができたのだが、それがなされなかったために、日本各地で日本政府の弱腰を責めたてる「国民大会が次々に開かれ」、放火にまで走ることになったと記している。²⁷

実際、日露戦争の最後の時点では日本側にはもうほとんど戦争を続ける余力がなかったのである。しかし、多数の死傷者と多くの犠牲を払った末の勝利にもかかわらず、「敗戦国」ロシアから賠償金も取れなかったことが民衆の強い不満となり、桂内閣の御用新聞的な性格を持つようになっていた国民新聞社も暴徒の襲撃を受けることになった

のである。

こうして戦争が終わった後で近代戦争としての日露戦争の悲惨さやナショナリズムの問題に気づいた蘆花は、戦争の翌年の一九〇六年にロシアを訪れトルストイと会う決断をしたのである。ヤースナヤ・ポリャーナのトルストイの元で五日間を共にし散策や水泳を共にしながら、宗教・教育・哲学など様々な問題を論じた蘆花は、墨子を高く評価して、欧米をすでに「腐朽せむとする皮相文明」と呼びながら、力によって「野蛮」を征服しようとする英国などを厳しく批判し、日本やロシアなどには「人生の真義を知り人間の実生活をなす」という「特有の使命」があるとするとトルストイから強い感銘を受けた²⁸。

また蘆花は兄が見たのと同じようにトルストイと家族の意見の対立を観察しつつも、そこに非力さだけではなく、「来る者は拒まず、去る者は追わず、風の吹く如く、水の流るる如く、淡泊自在」なトルストイの他者に対するやさしさを見た。

本稿の視点から興味深いのは、文学を論じてロシアの作家のうち誰を評価するかとの蘆花の問いに、トルストイが「ドストエフスキー」であると答え、蘆花が『罪と罰』を読んだと述べ、その評価を問うと「甚佳甚佳（はなはだよし、はなはだよし）」と語り、また自作のうちでどの作品を最も評価するかという問いに対しては、トルストイが『戦争と平和』だが、しかしそこには「愛国に過ぎたる所あり」と答えていることである。

なぜならば、帰国後に書いた「勝利の悲哀」において日比谷騒動について、「単に失業者の乱暴、弥次馬の馬鹿騒ぎと看做し去るはあまりに浅薄也」と述べた蘆花は、『戦争と平和』を意識しながら、眼下にモスクワを見下ろして勝利の喜びを感じたはずのナポレオンがほどなくして没落したことにふれているからである。そして蘆花は日露戦争の勝利にわく日本について、その独立がもし「十何師団の陸軍と幾十万噸の海軍と云々の同盟とによつて維持せらるる」ならば、それは「実に愍（あは）れなる独立」であると批判し、言葉を ついで「一步を誤らば、爾が戦勝は即ち亡国の始とならん、而して世界未曾有の人類的大戦乱の原とならん」と強い危機感を表明したのである²⁹。

第三節 蘆花の『寄生木』と『殉死』、蘇峰の『吉田松陰』と『世に棲む日々』

こうして「勝利の悲哀」を書いたとき徳富蘆花は、「祖国戦争」に勝利したあとのロシア帝国と日露戦争に勝利した後の日本帝国の類似性を強く意識していたのだが、私たちの視点から興味深いのは、司馬がこのような蘆花の認識をふまえて、日露における「欧化」の反動としての「国粹」の問題を掘り下げていることである。この節ではまず『寄生木』と『殉死』を比較考察した後で、蘇峰の『吉田松陰』と『世に棲む日々』の問題を考察することにした。

小笠原善平から預かった「手記」を元にした長編小説『寄生木』を蘆花が出版するのは、善平死後の一九〇九年のことであった。興味深いのは、『寄生木』の「後の巻」において蘆花が、「青山高樹町に良平は嘗て寄生木を託した人を訪ふた」として手記だけに不らずに、主人公と自分との関わりをも示しながら次のように描いていることである。「征戦の三年は面（かお）の滑（すべ）つこい士官候補生を、一人前の男に仕上げた。彼（引用者註―蘆花）は喜んで良平を書斎に延（ひ）き、暖炉を擁して小半日話した。彼は日本が今百尺竿頭（かんとう）一步を進む可き時であることを切言（せつげん）し、良平其人の生涯も一大進化を要するの時であることを切言した。剣を抛（なげう）って平和の人となれと勧告し、良平は黙って俯（うつむ）いてじつと聞いて居た。日暮れに良平は辞し去った。別るる時彼は一冊の新約全書を贈った」（『寄生木』後の巻・「沼津」）。

さらに、良平が蘆花とともにトルストイの自省録「悪の爆発を恐るゝなかれ」のくだりなどを共に読んだことにもふれた蘆花は、この作品の終わり近くで「身体虚弱にして軍職に堪え能わず」として退職する旨を報じた良平の大木將軍への次のような手紙を載せている。「残酷なりき日露戦争間、少なからず感ずることも有之、露国を研究したし露国を研究したしとは久しく小生の脳裏に銘刻せられしことに御座候…中略…人道のため平和の唱道者と相成りたき理想に候」（『寄生木』後の巻・「武蔵野の雪」）。

こうして小説『寄生木』は、そのエピローグともいえる「後の巻」

において戦争を否定し、トルストイをふたたび尊敬するようになった。蘆花自身の考え方とも深いつながりを示す形で終わっていたのである。ただ、平岡敏夫は「この小説『寄生木』は乃木將軍の姿を生きたと刻んでいる」ことでも知られるとし、「乃木將軍好きであった蘆花としても、身近にいた善平が描きあげた乃木將軍の姿には強くひかれるところがあつたはずである」と書いている³⁰。実際、前田河広一郎も『寄生木』が「百千の乃木文学よりも、將軍の日常生活の一断面を、一つの角度から近距離に捉へてゐるので、はるかに読者に親しみを与へる」とし、「ことにしばしば出て来る良平との一問一答には、なんとも云はれぬ英雄的な温かみを感じられる」と書き、さらにここに描かれている「訓話はそれ自身乃木言行録のテキストでなければならぬ」と続けていたのである³¹。実際、立身出世を望んで自分勝手になりがちな良平をいさめる大木將軍のときに厳しくときに暖かい言葉は、当時の読者をも感激させたことはたしかだろう。

さらに、ここには自分の恩人である將軍に対する篠原良平の熱い思いも多く描かれている。たとえば、かつて多くの戦死者を出した二〇三高地で大木司令官から「おッ、篠原ッ。うーむ、祐保（すけやす）も死んだわい。どっか其辺の谷間（たにあい）あたりに埋（い）けとる筈……」と語りかけられたとき、「良平は一句も出ない。涙が頬を伝うて、はらはらと地に落ちた。此一瞬間、良平の眼の前には、つい昨年十一月、祐保君の士官学校卒業式に列席し、莞爾として居られた將軍の顔があらわれた。忽ち赤坂の邸の涙に暮るる令夫人の姿があらわれた。どうしても此戦争に死ななければならぬ、と良平はむらむらと思った」と記されているのである（『寄生木』・下巻第二章「爾靈山上」）。

司馬遼太郎は『殉死』を書いたとき、乃木家の書生だった『寄生木』の主人公についての暗い気分が、まだつづいていたように思える」と記したが、大正三年に書いた「縮刷寄生木序」で蘆花が「此機会をもつて、一事本文の誤を正さねばならぬ」と記していたことを紹介した平岡敏夫の文章は、この間の事情を明らかにしている。

すなわち、蘆花はここで篠原良平が実は「短銃（ぴすとる）を以て自殺した」ことを明らかにし、それは「二令息の追腹を切つたような

もの」であり、さらに「明治天皇の大葬を機に、大將夫妻は自殺した」が、良平は「恩人夫妻の為に死出の道払いをしたとも見られる」と書いていたのである³²。

一方司馬は『坂の上の雲』の終章において、「乃木という人物は、すでに日本でも亡びようとしている武士道の最後の信奉者であった」としながらも、秋山好古との比較をとおして、その精神主義や縁故主義の傾向を鋭く批判して、「好古は乃木がきらいではなかった。しかし乃木の旅順要塞に対する攻撃の仕方には無言の批判をもっていた」ようであるとし、日本の騎兵が有していた機関銃の威力を指摘しながら、「日本の非力な騎兵が数倍のミシチェンコ騎兵団をなんとか追いはらってゆくことができたのはおれの功績ではない」として、「精神力を強調するあまり火力を無視するという傾向はどうも解せない」という彼の言葉を紹介している（Ⅷ・「雨の坂」）。

実際、『寄生木』では日本の騎兵を率いた秋山好古が直面しなければならなかったロシアのミシチェンコ騎兵団が、日本海の日露戦争での勝利が伝えられた後も圧倒的な威力を持つて日本軍を脅かしていたことも詳しく描かれていた。秋山好古の言葉は「明治維新」で新しい個人の自立を獲得したかに見えた民衆が、日露戦争のころには「命令に対する絶対的な受動性」を持つようになり、無謀な突撃命令に従って多数の兵士が黙々と死んでいったと指摘して、「国家主義的な教育」の危険性を指摘するようになる司馬の視点とも重なっていたのである³³。そして、司馬は「身を犠牲にするとはいいつつも、台湾総督をつとめたり、晩年は伯爵になり、学習院長になったり」した乃木と比較しつつ、「好古は爵位ももらわず、しかも陸軍大將で退役したあととは自分の故郷の松山にもどり、私立の北予中学という無名の中学の校長」を、「黙々と六年間」つとめたことを紹介している。

ここでは蘆花と司馬の視点の違いが明らかであろう。つまり、明治時代の文人であった蘆花は乃木大將の人格を高く評価したが、学徒出陣で下士官として戦場に赴いていた司馬は、乃木の人格や詩的才能を高く評価しつつも、多くの兵士を死なせた司令官としての乃木の資質や、そのような乃木を縁故によって引き立てた藩閥政治にたいしてはきわめて厳しいのである。

この意味で興味深いのは、『坂の上の雲』の前年に書いた『殉死』において乃木希典の思想に深く迫っていることである。その後の司馬遼太郎の歴史理解にも深く関わっているので、少し長くなるが引用しておきたい。

司馬はまず乃木希典が「松蔭の刑死後、希典は松陰の叔父であり師匠であつた玉木文之進のもとにあずけられ、唯一の住みこみ弟子として薫育されている」ことを紹介して、「長州における陽明風山鹿学派のもつとも正当な系譜を継いでいるであろう」とした。そして、山鹿素行が「漢学者としてはめずらしく神道を研究し」、それに傾倒して、「極端な国粹主義者」となつたと記して、「希典にとつて終生わすれられなかった感動は、独逸から帰朝後」に、「皇室絶対思想ともいふべき主題でつらぬかれていたため素行生存中の江戸初期の政体下では刊行は不可能」であつた『中朝事実』を発見したことであらうとした。

そして、「日本は神国なるがゆえに尊し」という感動をもつて書かれたこの書は、「学問の書というよりも宗教書」に近く、「天孫光臨のくだり」は「神勅至れり。聖主万々世の嚴鑑なり」と説かれ、「中朝（日本）の文物、さらに外朝に愧（は）ぢず、その威武の如きは外朝にまた比倫すべからず」と続いていることを紹介して、「希典は、日夜これを手写した。写しおわるとさらに写してひとにもあたえ、写したうえでもさらにそれを読んだ」と書いた³⁴。

司馬は『坂の上の雲』を書き上げてから日露戦争後の日本が「無敵皇軍とか神州不滅とかいう」用語によつて、「自国」を「他と比較すること」を断つたことを鋭く批判するようになるが、『殉死』を書く中で陸軍におけるこのような思想の源流の一つが乃木大将から発生していることを確認していたといえよう。

しかも『坂の上の雲』の前半部分とほぼ同時期に司馬は、蘇峰の『吉田松陰』を意識しつつ、吉田松陰をすぐれた教育者として描いた『世に棲む日々』（一九六九〜七〇）を書いていた。歴史家の磯田は、戦前のイデオロギーの代わりに「自由な個性」や「合理性」に価値をおいて歴史を書いた司馬を高く評価しつつも、彼が「歴史や人物」を、しばしば「デフォルメして描いている」とし、「徳富蘇峰が描く吉田松陰と、司馬さんが描く吉田松陰とは、まるで別人のようである」

と指摘した。そして、磯田は「激烈に尊皇攘夷を叫んでいた」吉田松陰は、徳富蘇峰が描いたように「天皇主義者」の面が強かったが、司馬はそのような面にはふれずに、「自分の書きたい『優しい教育者・吉田松陰』の像をひたすら描いた」と批判したのである³⁵。

たしかに、資料にあたりながらこの長編小説を書き進めた司馬は、蘇峰の主人公との差異を意識しながら、松陰のうちにそれまであまり語られてこなかった感受性の鋭く明晰な文章の書き手を見出して、明るい松陰を描き出していた。しかし、このことは司馬が「歴史の事実」を無視したことを意味しないだろう。この意味で注目したいのは、「革命の大悲劇」には「予言者」、「革命家」、「建設的革命家」という「三種の役者を要す」として、松陰を「革命家」に分類していた蘇峰の分類を踏まえつつ³⁶、司馬がここで別な位置づけを行っていることである。

すなわち、司馬は『世に棲む日々』において蘇峰と同じように革命期の人間を三種類に分類しつつも、松陰を「予言者」とし、高杉晋作を「行動家」に、伊藤博文を「処理家」と位置づけ、「処理家のしごと」を「先覚者たちの理想を容赦なくすて、処理可能なたちで革命の世をつくり、大いに栄達することと規定していたのである（Ⅱ・二七日、晴れ）。

そして、このように「処理家」を厳しく批判した司馬は、「五人扶持の足軽の出」であつた山県狂介が奇兵隊の「内務的な仕事に精励」することによつて隊の実権を握つたと指摘し、「こういう男が、明治日本の陸軍の法王とよばれるほどの存在となり」、「ついに明治政府そのものをにぎる人物」になつたと記した（Ⅲ・「山県と赤根」）。そして奇兵隊を率いた山県が藩政府との交渉中に「夜襲」をしかけていたことについて、それは武士ではなく足軽の発想であるとし、山県が元帥でありながら参謀本部長も務めていた日露戦争の際にも、日本軍が奇襲をしかけており、ロシア皇帝から「日本は卑怯である」と「公式に」抗議を受けたことにも注意を促したのである（Ⅳ・「絵堂の奇襲」）。

そして、この小説のあとがきで司馬は、「私は日本の満州侵略のころはまだ鉛玉をしやぶる年頃だったが、そのころすでに松陰という名

前を学校でかされた」とし、松陰の名前は「明治国家をつくった長州系の大官たち」が、「国家思想の思想的装飾としてかれの名を使つて以来、ひどく莊嚴で重苦しい存在」になっていたと説明した。そして「国家が変になって」くると、「松陰の名はいよいよ利用された」と司馬は続け、「そういうことが、松陰を知ることなしに、私に毛嫌いさせた」と書いていた(Ⅳ・「あとがき」)。

このような司馬の感想は、乃木と親しいつきあひのあった蘇峰の思想とも深く関わっているのである。すなわち、日清戦争前に書いた初版の『吉田松陰』において、「王政打倒によるイタリア統一と国民国家の形成を説いた革命家」マツツイーニと比較しつつ、革命家としての松陰の意義を説いていた蘇峰は、日露戦争後の一九〇八年に大幅に書き改めた改訂版の『吉田松陰』を発行するが、「蘇峰蘆花関係年表」によれば、それは「乃木希典の要請と校閲による」ものであったのである³⁷。

徳富蘇峰の思想の軌跡を研究した米原謙は、これら二つの『吉田松陰』を比較して、「初版の第一〇章『攘夷』は松陰が『無謀の攘夷論者』ではなく開国論者だったことを強調して終わっている」が、一九〇八年の改訂版では「その末尾に『彼は実に膨張的帝国論者の先駆者なり』の一句をつけ加え」ていることに注目している。そして、米原は改訂版では「革命家としての松陰」と「松陰とマツツイーニ」の章が削られ、代わりに「松陰と国体論」、「松陰と帝国主義」、「松陰と武士道」などの章が書き加えられていることを指摘した³⁸。このころ蘇峰は「国内における階級的分裂を阻止」するとして、「国民統合のシンボルなるものとして、皇室中心主義を高唱」するようになっていたのである³⁹。

この意味で注目したいのは、木下直江が『火の柱』において主人公を不敬罪で訴えようとする企てを描いていたが、一九一〇年六月には幸徳秋水たち二六名の社会主義者が天皇の暗殺を謀ったとして大逆罪で捕らえられ、九月には『火の柱』などの社会主義的な傾向を持つ書物が発売禁止とされ、その翌年には非公開裁判で幸徳秋水など一二名が死刑となったことである。しかも、クリミア戦争の数年前にドストエフスキーたちペトラシエフスキー会員がシベリアに流刑となったロシアの事件では、皇帝暗殺の噂が逮捕のきっかけになっていたが、大逆罪で処刑されることになる幸徳秋水も、一八七二年にドイツ皇帝が無頼漢に狙撃されると、それを口実にビスマルクが社会党の弾圧をしたことを一九〇四年に書いた論文で指摘していたのである⁴⁰。

秋水たちの処刑を知った徳富蘆花は第一高等学校において行った講演で、「明治初年の日本」には「自由平等革新の空氣」がみちみちて、「日本はまるで筍の様にずんずんと伸びて」きたと指摘し、刑死した吉田松陰に言及しながら「新思想を導いた蘭学者」や「勤王攘夷の志士」は、みな「時の権力から云へば謀叛人であった」とし、「国家百年の大計から云へば眼前十二名の無政府主義者を殺して将来永く無数の無政府主義者を生むべき種子を播いて了ふた」と激しく糾弾した⁴¹。

一方、蘇峰は後に弟が自分には全く相談なしに、直接桂首相に逮捕者助命の嘆願書を出したことを「予は桂内閣と極めて親密なる干係(ママ)にあったから、予に向かつて其の意見を吐くべきであった」と記した⁴²。しかし、すでに「帝国主義の主唱者に変貌」していた兄蘇峰が、その厳しい批判者たちの助命に動くとは蘆花には思えなかったであろう。

司馬も『旅順』から考える」というエッセーで、「日露戦争後の論功行賞」では、「長州系の軍人だけでも二人」が、「華族になつたり昇格した」が、その理由の一つは山県有朋を「侯爵から公爵に」のぼらせることだったと記していた⁴³。このように見てくるとき、山県に対する司馬の厳しい批判の矛先が、「長州系の大官たち」と結びつくことによって勅撰貴族院議員にまで出世し、満州事変の後には『公爵山県有朋伝』(一九三三)を刊行した徳富蘇峰にも向けられていたことは明白だろう。

実際、蘇峰は一九一六年に発行した『大正の青年と帝国の前途』では、「我が日本国民は、国家が剃刀の刃を渡るが如く、只だ帝国主義に由りて、此の国運を世界列強角逐の際に、支持せざる可からざる大道理」を、まだ徹底的には会得していないと主張して、「何物よりも、大切なものは、我が日本魂也」とし、「日本魂とは何ぞや、一言にして云へば、忠君愛国の精神也。君国の為めには、我が生命、財産、其他のあらゆるものを献ぐるの精神也」と記していたのである⁴⁴。

一方、蘇峰の『大正の青年と帝国の前途』が百万部を越えていることに注意をうながした坂本多加雄は、この書が「知識人層とは一応区別された一般読者の嗜好にかなうもの」であつたとし、『近世日本国民史』にも言及しつつ、「物語」の形式によって「事実」を提示したとして「歴史家」の蘇峰を、「巧みな『物語』制作者」と高く評価した。⁴⁵ このような見方は『坂の上の雲』が、「欧州最大の陸軍国」を破り、「欧州列国の従属下にあつた」アジアや中東の人々を勇気付けた日露戦争を、「物語の形式」で感動的に描いているとして評価する傾向にも強く反映していると思われる。たとえば、藤岡信勝は『坂の上の雲』では「エリートも民衆も健康なナショナリズムに鼓舞されて、その知力と精力の限界まで捧げて戦い抜いた」ことが描かれており、「司馬の小説と史論を組み合わせると」新しい歴史観をうち立てることができるとして、歴史教育改革の必要性を訴えたのである。⁴⁶

しかし、史実を注意深く調べながら日露戦争を書き進めてるなかで、司馬はこのような歴史小説は「事実拘束される」が、「官修の『日露戦史』においてすべて都合のわるいことは隠蔽」されていることをすでに「あとがき四」で指摘していた。そして『坂の上の雲』を書き終えた後で司馬は、「戦争は勝利国においてむしろ悲惨である面が多い」とし、「帝政末期のロシアとそっくりの愚鈍さを示した国家」が、「太平洋戦争をやった日本である」として、比較文明学者の山本新と同様に近代化の過程で「欧化と国粹」のサイクルに揺れたロシアと日本との共通性を鋭く指摘したのである。⁴⁷

実際、司馬遼太郎の考察をふまえるならば、日露戦争後に「明治国家」に起きた事態は、すでにロシア帝国においても起きていたのである。すなわち、近代化（欧化）によって「富国強兵」を実現したロシアが「祖国戦争」でナポレオンの大陸軍を大敗させると、それまでフランス帝国の軍事力の前に面従腹背していたヨーロッパの諸国は一斉に反攻に転じて、「諸国民の解放戦争」が起きた。さらには日本ではアジアの解放を名目とした「大東亜戦争」の正当性も語られるようになってきているが、ニコライ一世のもとで「正教・専制・国民性」という国粹的な理念を定めていたロシアでも、トルコの圧政に苦しむロシアと同じギリシャ正教を信じるバルカンの諸民族を解放するという

「スラヴ共栄圏」的な思想に支えられて、クリミア戦争に踏み切っていたのである。

こうして『坂の上の雲』を描くことで司馬遼太郎は、「祖国戦争」に勝利した後で、それまでの劣等感の裏返しとして「自国」を神国化する思想が広がったロシア帝国と、その強国を破って日露戦争に勝利した後の日本帝国との類似性を強く意識するようになったといえよう。⁴⁸

結語 「公」としての「国民国家」から「公」としての「地球」へ

こうして『坂の上の雲』において日露戦争を考察するなかで、「愛国心」を鼓舞して戦争へと突き進んだ「国民国家」の問題に気づいた司馬遼太郎は、蘇峰を凌駕するほどの「美しい物語」の制作者としての才能を持ちながらそれを徐々に封印して、『街道をゆく』（一九七一〜九六）や『この国のかたち』（一九八六〜九六）などの執筆に重点をおくことになるのである。そしてそれは「国民国家」を「公」とする見方から、「大地や地球」を「公」とする見方への移行とも深く関わっていたように思われる。

すなわち、「明石海峡と淡路みち」の稿で、「公」の概念が「国民教育の上で、国権という意味にすりかえられてきた」と記した司馬は、「義勇奉公とか滅私奉公などということは国家のために死ぬということ」だったとして厳しく批判し、「海浜も海洋も、大地と同様、当然ながら正しい意味での公そのものであらねばならない」が、間違つた「公」の概念のために、「戦後社会も、土地に関する暴慢な私権」の上にのって、「日本人そのものが身のおきどころがないほどに大地そのものを病ませてしまっている」と指摘していたのである。⁴⁹

自然観に対するこのような強い問題意識は、「土を耕し他の力に頼（よ）らずして生活をする者が国の力也」とする考えをトルストイから聞いて、自分もゆくゆくは「少なくとも半農の生活をする心算に候」と答え、実際に郊外の粕谷に土地を買って半農の生活を始めていた徳富蘆花の再評価とも関連していただろう。⁵⁰

なぜならば、北海道で農業に従事するようになる医者関寛斎を主

人公の一人とした歴史小説『胡蝶の夢』（一九七六～七九）において司馬は、「ついでながら寛斎は最晩年に、齡下のいい友を得た。徳富蘆花であった。かねて寛斎はトルストイに関心をもっていたが、蘆花がトルストイを訪ねたということを知って、その話をきくべく不意に訪問した」と書いていたのである（Ⅳ・「陸別」）。しかも蘆花が『みづのたはこと』において寛斎の死を悼んで「……形に於て乃木翁に近く精神に於いてトルストイ翁に近く、而（しかう）して何（いづ）れにもない苦しみがあつた」と書いていることも『胡蝶の夢』では紹介されていた（Ⅱ・「ボンペ」）。

そして司馬は『北海道の諸道』において、蘆花を訪れたとき寛斎が『巡礼紀行』を「すでに読んでいたことはまちがいない」とし、「人間の幸福とはなにに存するか」ということが書かれた蘆花の『トルストイ』も読んでいたであろうと推測し、寛斎の自殺が息子の「もうけ農業主義」を批判した諫死に近いものであったことに注意を促したのである⁸¹。

そして一九八六年の「樹木と人」という講演で司馬は「チェルノブイリの原子炉」の事件に言及して、「大気というものは地球を漂流していて、人類は一つである、一つの大気を共有している。さらにいえばその生命は他の生物と同様、もろいものだ」という思想を全世界に広く与えた」と語った⁸²。このような広い視野は、日露の「文明の衝突」を防いだ江戸時代の商人・高田屋嘉兵衛が、黒潮の流れに乗って航海することで「自国中心主義」を脱して、「文明間の交流」の意義を認識できる能力を備えていたことを明らかにした『菜の花の沖』（一九七九～八二）の成果でもあった⁸³。

こうして日露戦争を直視しながら『坂の上の雲』を書き終えたことで司馬は、「自国」を「公」とした近代の歴史観が、「自己」（自民族、自国）の絶対化と、「他者」（他民族、他国）の支配を正当化するだけでなく、人間による自然の奴隷化をも正当化することに気づき、「公」としての「地球」という比較文明的な新しい視野を獲得することになったのである。

（本稿は日本ロシア文学会「大阪外国語大学」での発表や、日本比較文学会九州支部研究会「九州大学」と世田谷文学館での講演をもとに、加筆を行ったものである）

- | | | | | | | | | | | |
|---|-------------------------------------|-------------------------------------|---|---|--|--------------------------------------|---|-------------------------|-------------------------------|--|
| *11 | *10 | *9 | *8 | *7 | *6 | *5 | *4 | *3 | *2 | *1 |
| 司馬遼太郎、『坂の上の雲』、文春文庫、第三巻。以下、巻数をローマ数字で、章の題名とともに本文中に記す。なお、『世に棲む日々』（文春文庫）と『胡蝶の夢』（新潮文庫）も同様に記す | 司馬遼太郎、『司馬遼太郎 歴史歓談』中央公論新社、二〇〇〇年、三八四頁 | 司馬遼太郎、『この国のかたち』（第六巻）文春文庫、二〇〇〇年、一四五頁 | 阿部軍治、『徳富蘆花とトルストイ——日露文学交流の足跡』彩流社、一九八九年、三頁。以下、書名を『蘆花』と略して頁数とともに本文中に示す | 磯田道史、『日本人の良薬』、『二冊の本』、朝日新聞社、二〇〇三年一〇月、二二頁 | 司馬遼太郎の歴史観の深まりについては、高橋『「明治国家」から『日本帝国』へ——司馬遼太郎の歴史認識』、『比較文明』、行人社、第一九号、二〇〇三年参照 | トルストイ『爾曹悔改めよ』、『幸徳秋水全集』第五巻、昭和五七年、一八二頁 | 徳富蘆花『トルストイ』（『徳富蘆花集』第一巻）、日本図書センター、一九九九年（初出は一九九七年）、二〇五～六頁。以下、書名と頁数を本文中に示す | 司馬遼太郎、前掲書『この国のかたち』、一四五頁 | 徳富蘆花、『不如帰』岩波文庫、一九三八年、一四二～一五七頁 | 徳富蘆花『黒潮』、『明治文学全集』（第四二巻）、筑摩書房、昭和四一年、六三～五頁 |

- *28 *27*26*25 *24 *23 *22 *21 *20 *19 *18 *17 *16 *15 *14*13*12
- 徳富蘇峰『弟 徳富蘆花』中央公論社、一九九七年、一二三頁
 神崎清『解説』、前掲書『明治文学全集』、四〇〇～四〇二頁
 徳富蘇峰『将来之日本』『徳富蘇峰・山路愛山』、中央公論社、一九八四年、七九～八三頁、一七五頁
 トルストイ『戦争と平和』(第三卷) 工藤精一郎訳、新潮文庫、昭和四十七年、七頁
 福沢諭吉『福沢諭吉選集』第七卷、岩波書店、一九八一年、五七頁
 平岡敏夫『日露戦後文学の研究』上巻、有精堂、昭和六〇年、三三九頁
 徳富蘆花『寄生木』(『蘆花全集』第八卷)、新潮社、昭和四年。以下、書名と頁数を本文中にのみ示す
 中島誠(文)・清重伸之(絵)『司馬遼太郎と「坂の上の雲」』現代書館、二〇〇二年、一三六～一四三頁参照
 司馬遼太郎『坂の上の雲』を書き終えて『歴史の中の日本』中公文庫、昭和五十一年、九八頁
 トルストイ、前掲訳書『幸徳秋水全集』第五巻、一八二～一八八頁
 柳富子『トルストイと日本』、早稲田大学出版会、一九九八年、二一～三一頁参照
 山極圭司『解説』『木下直江集』(『日本近代文学大系』第二〇巻)、角川書店、昭和四十八年、八～一六頁
 佐藤勝は『火の柱』における理念や人物造形が『不如帰』や『黒潮』からの強い影響下にあることを具体的に示している(同右、四三四～五頁、四四五～六頁、四四九頁)
 井口和起、『日露戦争の時代』吉川弘文館、一九九八年、七七頁同右、三～九頁
 司馬遼太郎『「昭和」という国家』NHK出版、一九九八年、三八頁
 徳富蘆花『巡礼紀行』、前掲書『明治文学全集』、一八六頁。なお、阿部軍治、前掲書、第五章参照

- *47 *46 *45 *44*43*42 *41 *40 *39 *38*37*36*35*34*33*32*31*30*29
- 徳富蘆花『勝利の悲哀』、前掲書『明治文学全集』、三六七頁
 平岡敏夫、前掲書、三四五頁
 同右、三五～一頁
 同右、三六一～二頁
 司馬遼太郎、前掲書『歴史の中の日本』一〇九頁
 司馬遼太郎『殉死』文春文庫、一九七八年、一一四～五頁
 磯田道史、前掲エッセー、一三三頁
 徳富蘇峰、前掲書『徳富蘇峰・山路愛山』、二八九頁
 徳富蘇峰、前掲書『弟 徳富蘆花』、二二四頁
 米原謙『徳富蘇峰——日本ナショナリズムの軌跡』、中公新書、二〇〇三年、一〇五頁、一〇八頁
 隅谷三喜男『明治ナショナリズムの軌跡』『徳富蘇峰・山路愛山』(『日本の名著』第四〇巻)、中央公論社、一九八四年、三六頁。なお、宇野田尚哉『成立期帝国日本の政治思想』『比較文明』第一九号、行人社、二〇〇三年参照
 原卓也・小泉猛監訳『ドストエフスキーとペトラシエフスキー事件』集英社、昭和四十六年、四〇頁。幸徳秋水『世界の名著』第四巻、中央公論社、一九八四年、四〇九～四一一頁
 徳富蘆花『謀反論』前掲書『明治文学全集』、三六九～三七一頁
 徳富蘇峰、『弟 徳富蘆花』中央公論社、一九九七年、一三六頁
 司馬遼太郎、前掲書『歴史の中の日本』、八〇頁
 徳富蘇峰『大正の青年と帝国の前途』、筑摩書房、一九七八年、二二一頁、二八二頁。蘇峰の歴史観と大正と昭和初期の青年たちの状況の関係については、高橋「ナショナリズムの克服——ひとびとの覚悟」考、『異文化交流』第五号、二〇〇三年参照
 坂本多加雄『近代日本精神史論』講談社学術文庫、一九九六年、二九二頁、三一四頁
 藤岡信勝『汚辱の近現代史』徳間書店、一九九六年、五一～六九頁
 司馬遼太郎、前掲書『歴史の中の日本』九五頁、一一〇頁。

*48

*49

*51*50

*52

*53

山本新『周辺文明論——欧化と土着』神川正彦・吉澤五郎編、刀水書房、一九八五年。および高橋『欧化と国粹——日露の「文明開化」とドストエフスキー』刀水書房、二〇〇二年参照
クリミア戦争前後のロシアと日中戦争前後の日本の比較は、高橋「司馬遼太郎のドストエフスキー観——満州の幻影とペテルブルクの幻影」『ドストエフスキイ広場』第一二号参照

司馬遼太郎『甲賀と伊賀のみち、砂鉄のみちほか』朝日文庫、一九七九年（初出は一九七四～五年）、一八九頁。高橋「司馬遼太郎の福沢諭吉観——『公』の概念をめぐって」『文明研究』第二二号、二〇〇三年参照

徳富蘆花「巡礼紀行」前掲書（『明治文学全集』、一七二～三頁
司馬遼太郎『北海道の諸道』朝日文庫、一九八五年（初出は一九七九年）、二五四～二七一頁

司馬遼太郎「樹木と人」『十六の話』中公文庫、一九九七年、三二五頁

高橋『この国のあした——司馬遼太郎の戦争観』のべる出版企画、二〇〇二年、第四章参照